

「埼玉県の紅花」の歴史と今日  
塩田公子 (青葉学園短大)

【目的】 紅花で染められた紅染の衣服は珍重され、その着用は上流社会の人のみに許され、庶民は着ることができなかった。紅花は、埼玉県において、どのように栽培、取引、使用されていたのかを調査し、検討する。

【方法】 埼玉県立博物館、大宮市博物館、川越市博物館、埼玉県立民俗文化センター、桶川市歴史民俗資料館などの所藏品及び資料を調べ、県立図書館などで市誌等の紅花についての記述を収集し、関連ある地域の調査を行う。

【結果】 江戸末期から、明治初年にかけて数百年近く上尾、桶川付近で紅花はつくられていた。須田家には、紅花売買 紅花送り 紅花勘定 紅花取引書状等の紅花関係の文書が約400点ほど残されている。中山道の宿場町として栄えた桶川付近の紅花は、「桶川嚙脂」といわれ、花びらが、漢方薬や、染料、口紅の原料として用いられた。

この地方では、秋に種を蒔き、翌年の5月上旬頃咲いた花を摘み取り乾燥する。他の産地に比べて早い時期にできるので「早場」と呼ばれ、江戸に近く、また良質であったため、高値で売れたという。紅花は農家、商家において、商品作物として、生活を支える重要な産物であった。花が咲き始めると、紅花商人は忙しくなり、付近の仲買人や問屋、大宮、浦和、岩槻の問屋、そして江戸や京都から人々が集まった。問屋は、多くの仲買人を使って紅花の買付をし、紅花商人はこの紅餅を買い、紅屋に売った。紅屋の多くは京都にあり、紅花送りには、船と陸送の両方が利用された。現在、紅花は桶川市川田谷を中心に大里郡江南町や川本町で栽培されている。そして桶川市内で染色されている。